

## アリー・アブド・アツ・ラティーフの生涯

——スーダン「一九二四年革命」の社会的背景分析の素材として——（上）

栗田 禎子

はじめに

アリー・アブド・アツ・ラティーフ 'Ali 'Abd al-Latif（一八九六頃～一九四八）は、一九二四年、イギリスの植民地支配下にあったスーダンで起きた「一九二四年革命」において中心的役割を果たした組織「白旗同盟」の指導者だった人物である。「一九二四年革命」はスーダン近現代史研究の中では、通常、同国初の（近代的な意味での）民族運動と見なされている。

彼は同時に、その出自に注目するならば、当時の英当局が「脱部族化した黒人」（“negroid but de-tribalized”）と呼んだ人々、すなわち南部やヌバ山地といった、スーダン国内で周縁的位置に置かれた地域（それは歴史的経緯から、アラビア語やイスラームが浸透していない地域と一致していた）出身ではあるが、親の代に奴隷として北部に連れて来られたため、父祖の地との社会的紐帯を持たない者、に該当する。

アリー・アブド・アツ・ラティーフの生涯

筆者は既に別稿において「一九二四年革命」の性格を検討し、特に「白旗同盟」における「民族」概念の構造——それは「スーダン民族主義」を掲げると同時に「ナイル河谷の統一」（＝エジプトとの統一）を唱えるという一見矛盾したものであった——の分析を試みた。<sup>(1)</sup>

また、別の機会には、スーダン近現代史上における「脱部族化した黒人」の問題を取り上げ、それを介して過去数十年間のスーダンにおける社会変容の諸相に検討を加えた。<sup>(2)</sup>

本稿は、これまで筆者が行なってきたこの二つのアプローチをいわば統合する形で、アリー・アブド・アツ・ラティーフという、「スーダン民族主義」の初期の唱道者であると同時に「脱部族化した黒人」でもあった人物の生涯を検討しようとするものである。この人物の生涯を詳しく知ることは、スーダンにおける民族運動の展開を考える上でも、また、その背後にあった社会的現実を理解する上でも重要と思われる。本稿ではアリー・アブド・アツ・ラティーフの一生をできるだけ包括的に、具体的事実にこだわりながら復元・提示することをめざしたい。

アリー・アブド・アツ・ラティーフが近現代スーダン政治史上、最も重要な人物の一人であることは疑いを容れないが、意外なことに、彼の詳細な伝記は欧米のスーダン研究においても、あるいは独立後のスーダンにおける自国史研究の中でも書かれることがなかった。これは少なくとも部分的には、「一九二四年革命」以降のスーダンで生じた歴史的・社会的環境の変容の結果、現在のスーダンの知識人たちにはアリーの生涯を追体験することが難しくなっている、ということに起因するかもしれない。（別稿でも指摘したように）一九三〇年代以降英当局によって追求された「南部政策」の結果、「脱部族化」した人々が新規に北部に流入する道は断たれ、結果として一九四〇年代末までには、「脱部族化した黒人」がスーダン社会においてダイナミックな役割を果たすという現象は（それまでのような

形では)見られなくなった。そのため、英植民地支配初期に生きた「脱部族化した」将校アリー・アブド・アツ・ラティーフの一生は、現在、北部スーダンの知識人にとっても、あるいは南部スーダンの知識人にとっても、感情移入しにくいものとなっていると考えられるのである。

結果として、アリーについては、彼が民族運動の著名な指導者だったことは知られており、また、時には彼がその出自の点では「脱部族化した黒人」だったことへの言及がなされるが、彼を取り巻いていた社会的環境に関する具体的イメージはほとんど存在しない、という状況が存在する。たとえば、彼はどの程度まで「黒人」であり、「脱部族化」していたのか？(言い換えれば、彼が非アラブ地域出身者の子孫であるということほどの程度までその人生に影響を与えたのか？ どの程度まで彼は、「部族」的秩序から疎外されていたのか？ また、そもそもそのような「脱部族化」状態は、当時のスーダン社会において例外的なものだったのか？)「脱部族化した黒人」の社会的地位は実際はどのようなものだったのか？

また、アリーの文化的素養・背景はどのようなものであり、彼のアラブ・イスラーム世界に対する姿勢、他方でスーダン国内の非アラブ地域(南部やヌバ山地)に対する姿勢は、どのようなものだったのだろうか？ エジプトに対する彼の立場はどのようなものだったか？ その背後にはどのような個人的体験があり、またその立場はどのような歴史的・政治的コンテクストの中で表明されることになったのか？ マフデーイ運動については、アリーは何らかの評価を下していたのか？——これらの重要な問いに答える前提として、本稿では、まずはその手がかりとなる具体的事実をできる限り集め、提示することとする。

以下の叙述は、主として二種類の史料・情報源に拠っている。ひとつは、ハルトウームの国立文書館やロンドンの

公文書館（P R O）等に保存されている英当局側の資料（公安関係の報告書等）である。

もう一つはインタヴューによって得られた情報であり、これは

(1) 筆者がアリー・アブド・アッ・ラテイーフの親族（具体的には彼のいとこの息子であり、娘婿ともなったムハンマド・フサイン・リーハーン Muhammad Husayn Rihan、およびその娘であるドゥッリーヤ Durriya とサルワ Salwa）に対し一九八六～八七年および一九九五年に行なったインタヴュー

(2) 筆者がアリーの知人およびその子孫に対し行なったインタヴュー

(3) ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所によって一九七二年にアリーの妻アーツザ・ムハンマド・アブダッラー al-'Azza Muhammad 'Abdallah に対して行なわれたインタヴュー記録

から成る。

言うまでもなくこれらは全く性格を異にする史資料であり、点検・照合して事実と迫る作業は慎重に行なわねばならない。また、特に英当局側によって作成された記録を用いる場合には、これらの記録に、英植民地支配に対する抵抗運動を指導した人物に対する敵意、バイアスが（当然のことながら）存在するであろうことも、念頭に置いておく必要がある。

なお、紙幅の関係上、叙述は上下二回に分けて行ない、本稿（上）では、アリーの人生をその出生以来、一九二〇年代に政治活動を開始するまでの時期について検討することにする。「一九二四年革命」およびその後の経過に関しては、「下」で取り扱うものとする。

## 一 ハンダクという町

アリー・アブド・アッ・ラティーフの両親は共に、北部スーダンのハンダク al-Khandaq という町に暮らしていた経験を持つ。<sup>(3)</sup>

現在は見ることがないが、ハンダクは一九世紀には当時のスーダンにおける重要な商業拠点であった。ドンゴラ Dongola の南方、ナイル川の西岸に位置する同地は、ダール・フルルからの隊商とエジプトからナイルを遡ってくる商船とが出会う地点だったのである。この町の有力な商人家系としては、ムーサイヤーブ al-Musayyab (アブダッラーブ Abdallahb の一部。ハムザ・ムーサー Hamza Musa とその息子アブダッラー・ハムザ Abdallah Hamza 等の商人が有名)、ハサナーブ al-Hasanab (やはりアブダッラーブの一部)、そしてフバラー al-Khubara<sup>(4)</sup> (「ハビール Khabr」の複数形。「ハビール」は元来はダール・フルルからの隊商のリーダーとなる商人に与えられた称号) などが挙げられる。これらの富裕な家族は、多くの家内奴隷を所有していた。ハンダクにはまた、ハムザ・ムーサーとアフマド・パシヤ・アブー・アザーン Ahmad Pasha Abū Adhan (一八三八〜四三年にかけてのスーダン総督) の共同事業として建設された、インデイゴ精製工場も存在した。<sup>(5)</sup> これはアフマド・パシヤによって(商品作物の加工等のために) スーダン各地に建設された工場の一つであったが、これらの工場は奴隷労働に依存していたと言われる。<sup>(6)</sup> ハンダクにかなりの数の奴隷が存在したのは、それゆえ、自然なことであった。

アリー・アブド・アッ・ラティーフの父、アブド・アッ・ラティーフ・アフマド Abd al-Latif Ahmad は、ハサナー

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

ブの家系に属する富裕な商人アフマド・ハサン Ahmad Hasan の奴隷であった。<sup>(7)</sup> 彼の名の中の「アフマド」とは、あるいは、(おそらくはのちに彼が奴隷身分から解放された際に) この主人にちなんだ名づけられたものかもしれない。アブド・アッ・ラティーフはヌバ山地出身だったと言われるが、それ以上の詳細は不明である。彼の頬には北部スーダンのシャイキーヤ部族 al-Shayqiyā のそれに近いシユルーフ shulūkh (＝北部の習慣で、部族的帰属を示す傷痕、「入墨」) があったと言われ、これは彼が既に北部社会で一定期間生活していたことを示すと考えられる。<sup>(8)</sup> 他方、アリーの母は、アフマド・ハサンの甥ムハンマダイン・ムハンマダイン・ハサン Muḥammadayn Muḥammadayn Hasan の奴隷であった。<sup>(9)</sup> 名はサブル al-Sābir (アラビア語で「忍耐」)、あるいは「サブル・ザイン al-Sābir Zayn」(アラビア語で「忍耐は美德なり」の意) であった。<sup>(10)</sup> 彼女はティンカ Dinka (南部スーダン最大の住民集団) 出身であった。アブド・アッ・ラティーフとの結婚以前に、彼女は主人のムハンマダイン・ムハンマダインと結婚していた時期があり、ターヒル Ṭāhir という息子をもうけていた。<sup>(11)</sup>

両親のハンダクにおける生活については、アリー・アブド・アッ・ラティーフ自身がよく知っており、またそのことを特に恥じたり隠したりもしなかったようである。アリーはのちに、妻のアーツザ (後述のように彼女自身もハンダクと関係があった。ただしハンダクで暮らしたことはない) に、彼の異父兄弟ターヒルについて話している。<sup>(12)</sup> また、友人であり(「一九二四年革命」に際しては同志となる) ウバイド・ハーッジ・アル・アミーン Ubayd Ḥajj al-Amin のオムドゥルマーン Umm Durmān の自宅を訪ねる際には、必ずウバイドの母アルファ・ブント・アリー・アン・ヌール・アル・ハビール Ṭāifa bint 'Alī al-Nūr al-Khābir に親しく挨拶していたという。このアルファは(その名の示す通り) ハンダクの富裕な商人、前述のフバラーの家系の出身の女性であり、アリーの母をよく知っていた。<sup>(13)</sup> (ちな

みにアリーの父の所有者アフマド・ハサンも母方はフバラの出身であった。<sup>(14)</sup>

奴隷制は結局のところ、一九世紀のスーダンに厳然と存在した社会的現実であり、被害者たる奴隷の子孫たちもその記憶と何とか折り合いをつけつつ生きていくしかなかったのである。ハンダクの人々は奴隷を寛大に扱ったとされる。<sup>(15)</sup> 現在ハンダクで、当時の墓地では奴隷用の区画と自由人用の区画が別々になっていた様子を目にする<sup>(15)</sup>と複雑な感慨が湧くが、これも当時としては比較的寛大な待遇と言えるものだったのかもしれない。スーダンでは総督アフマド・パシャの治世以前は、奴隷の死体は埋葬されることがなく、ただ放置されて腐敗するにまかされていたと言われる。<sup>(16)</sup>

いずれにせよ、アリーの両親のハンダクにおける生活はやがて終わりを迎えた。マフデー運動が起き、旧体制が崩壊したのである。富裕な商人の多くはエジプトに逃亡した。ハリーフ・アブダッラーヒ（マフデーの後継者）のもとでマフデー国家がエジプト遠征を計画した際には、マフデー軍の司令官アブド・アッ・ラフマーン・アン・ヌジュミー *‘Abd al-Rahman al-Nujumi* がエジプトへの途上ハンダクを通過し、住民を「ジハード」に動員しようとするという現象も観察された。<sup>(17)</sup>

どのような経過だったのか正確には分からないが、アブド・アッ・ラティーフは主人アフマド・ハサンのもとを離れて、マフデー国家のジハーディーや *al-jihadya*（奴隷出身者を主体とする火器で武装した常備軍）に編入された。<sup>(18)</sup> これが主人による自発的な解放によるものなのか、それともマフデー国家体制下の特殊な政治的・社会的状況によるものだったのかは不明である。ついでアブド・アッ・ラティーフは、エジプト軍に編入された。これに関しても、はたして彼がマフデー軍から脱走したのか、それとも、たとえば両軍の戦闘の結果、捕虜となってエジプト軍に編



入されたのかは不明である。また、アブド・アツ・ラティーフとサブルがいつ、どこで結婚したのかも分からない。それは彼がマフデー軍に加わる以前のことだったのだろうか？サブルは夫に同行して、はるばるハンダクからエジプトまで移動したのだろうか？

ともあれ、アリー・アブド・アツ・ラティーフは一八九六年（一八九二年、一八九四年という説もある<sup>(19)</sup>）、スーダン・エジプト国境のワーデー・ハルファー Wadi Halfa 州（＝「国境州」）で、エジプト軍のスーダン大隊に属する兵士の息子として生を享けた。ハンダク出身の夫婦は新生活を始めることに成功したのである。

## 二 ワーデー・ハルファー

アリーの両親がワーデー・ハルファー州でどのような暮らしをしていたのかはよく分からないが、父アブド・アツ・ラティーフは第十三スーダン大隊、あるいは第十五スーダン大隊に属していたとされる<sup>(20)</sup>。現在、子孫らは、アリーの生年は「ファルカ Falka の戦いの年」（＝一八九六年）だった、と記憶している<sup>(21)</sup>。家族の間にこのような記憶が残っているということは、エジプト軍とマフデー国家軍の間で起きたこの有名な戦い（その中でエジプト軍の第十三スーダン大隊は重要な役割を果たした）に、アリーの父アブド・アツ・ラティーフ自身が従軍していたことを示唆しているのかもしれない<sup>(22)</sup>。

アリーがワーデー・ハルファー州で生まれ育ったということは、二つの点で重要である。第一にこれは彼が当初から、すぐれて軍事的空気の中で育ったことを示している。当時、同州はスーダン「再征服」を狙う英・エジプト軍

の最前線であり、ワーデー・ハルファーの町は軍事基地として急速に変容・再編されつつあった。<sup>(23)</sup> アリーの人生は、いわばその出発点から、軍隊と緊密に結びつけられていたと言える。第二に、彼の出生時にその両親の生活がこの地で営まれていたことは、その家庭に、両親の出身地とされるヌバ山地や南部スーダンの文化・風習、あるいは両親が生活したことのある北部スーダンのそれに加えて、エジプト独特の文化や風習も浸透していたであろうことを推測させる。エジプト軍のスーダン大隊に属していた兵士らに関しては、彼らがエジプトの風習（春の祭りシヤンム・アン・ナスイームなど）や食習慣に影響を受けていたことが指摘されている。<sup>(24)</sup> また、成人後のアリーは、スーフィー教団としてはアフマド・バダウイー教団に親近感を持っていたらしいが、エジプトのタンターに拠点を置く同教団は、スーダンではさほど影響力はなく、もっぱらエジプトで暮らした経験のある南部やヌバ山地出身の兵士の間で信奉されていた。<sup>(26)</sup>

もともとワーデー・ハルファー時代のアリーはまだ物心がついたかつかないかの状態であったから、この時期の生活がその後の彼の人生に与えた影響を過大に評価してはならないであろう。

一八九八年にスーダンが最終的に英・エジプト軍によって征服されると、アリーの家族はスーダンに戻った。<sup>(27)</sup>

### 三 ハルトウームへ

まもなく父アブド・アッ・ラティーフは退役して（軍内での最終的階級は伍長であった）、白ナイル川岸の町ドゥエム al-Duwaym へと移住した。当時ドゥエム郊外には、英当局が建設した、退役兵士のための入植地が存在したの

である。少年アリーも両親に同行したが、ほどなく、この土地ではほとんど教育の機会が得られないことに気づいた。彼は首都ハルトゥームに行くことを考え始め、この計画実現のため、当時ハルトゥームに住んでいた彼の「母方のおじ」<sup>(28)</sup>リーハーン・アブダッラーなる人物に頼ることになる。

リーハーン・アブダッラー Rīhān 'Abd Allāh はバフル・アル・ガザール州のゴグリヤル地区 Gogriyal のディンカ (その中のサブ・グループ、ディンカ・レク Dinka Rek) の出身だった。ディンカ語での本名は「アターク・ルー Atāk Rū」だったと言われる。多くの南部出身者同様、彼も奴隷狩り等の結果故郷から引き離され、最終的にエジプト軍に編入されて、エジプトに一定期間滞在した。のちに彼は将校の位まで昇りつめ、英・エジプト軍によるスーダンの征服、「共同統治」開始後はバフル・アル・ガザール州のルンベク Rumbek の行政官に任命されて、社会的にかなりの影響力を持つ人物となっていた。まだエジプトにいる時分に、彼は（上エジプト出身の父とディンカの母を持つ）女性と結婚し、フサイン Husayn という息子をもうけていた。この頃までには、しかし、彼はこの妻とは別れ、（やはりディンカ出身の）バフル・アル・ワールデー Bahr al Wardī という女性と結婚して、ハルトゥームのブリー地区 Buri に家族と共に住んでいた。裕福であり、ハルトゥーム市内の他の地区にも、もう一軒の家を所有していた。<sup>(29)</sup>

このリーハーン・アブダッラーがアリーにとって厳密な意味での「母方のおじ」（＝母サブルの実の兄弟）だったかどうかは分らない。奴隷狩りや戦争、長距離移動等によって引き離されてしまった家族の絆を、長期間にわたって維持する、あるいは復元することは現実にはかなり難しかったのではないかと想像される。サブルとリーハーンは必ずしも実の兄妹だったわけではなく、同じディンカで、せいぜい同じ地域の出身者という程度のつながりだった

のではないか、リーハーンはアリーの（広い意味の）「おじ」にすぎなかったのではないか、と考えることも可能である。<sup>(30)</sup>

ともあれ、アリーはこの人物に頼ることを決めてドウエムを発ち、ひとり船に乗ってハルトゥームまで来て、あちこち尋ね歩いた末に、ようやくブッリ地区のリーハーン・アブダッラーの家に辿り着いた。リーハーンはこの少年を歓迎し、ほぼ同い年だった自分の息子フサインと兄弟のように育て始めた。<sup>(31)</sup>

リーハーンの庇護の下、アリーはまずブッリ地区のハルワ Halwa（初等クルアーン学校）で教育を受けた。<sup>(32)</sup> ついでゴードン・メモリアル・カレッジに進み、そのちフサイン・リーハーンと共に、陸軍士官学校（一九〇五年創立）に入学した。<sup>(33)</sup>（当時の教育システムはかなり流動的であり、中等学校程度の教育を行なうゴードン・メモリアル・カレッジに一二年在籍してから陸士に転じる例は珍しくなかった。<sup>(34)</sup> 陸士での成績は良かったようで、一九一三年の卒業時にはその年の最優秀学生のための「総督メダル」を授与されている。<sup>(35)</sup> ゴードン・メモリアル・カレッジで学び、陸軍士官学校を卒業したことで、アリーは当時のスーダンの知識人層の一員としてのステータスを獲得し、のちにオムドゥルマーンの「学卒者クラブ Nadi al-Khurjūn」（一九一八年創立）のメンバーともなった。<sup>(36)</sup>

奴隷出身の両親の間に生まれながら将校にまでなったアリーのこのような経歴はのちに英当局によって、「社会の層から一足とびに地域社交界の華になった」とも言うべき出世、異常な社会的上昇の事例として描き出されることになる。<sup>(37)</sup> しかしながら、アリーのケースがさほど例外的だったとは考えられない。英・エジプト「共同統治」初期の首都部（ハルトゥーム、オムドゥルマーン）には、（後述の、アリーの妻アッザの例が示すように、マフディー国家期の「ジハーデーヤ」とも一定の連続性を有する）南部やヌバ山地出身者のコミュニティーが存在した。そしてこ

のコミュニティは、都市下層民と密接に結びついていると同時に、他方では、植民地支配下のスーダンで急速に形成されつつあった「エフェンディーヤ」層（官吏・軍将校）、特に将校の、潜在的供給源を成していたとも考えられるのである。「社会の屑」と「地域社交界の華」との距離は、英当局が描き出したほど遠くはなく、当時のスーダン社会は一定程度の流動性によって特徴づけられていたと考えられる。アリーの友人の一人ザイン・アル・アブ・デイン・アブド・アッ・ターツム Zayn al-'Abdin 'Abd al-Fattm (のちに「白旗同盟」の指導的メンバーとなる) は、やはりデインカの奴隷出身者の息子で、将校となった人物だった。彼の場合、その父アブ・デイン・アブド・アッ・ターツムはエジプト軍に編入されて軍内で縫製の技術を身につけ、ワー・デイン・ハル・ファーにしばらく留まったのち、一八九八年の征服後にハルトゥームに来て仕立屋を開業した。<sup>(38)</sup> このアブ・デイン・アブド・アッ・ターツムの一家とリー・ハーン・アブ・ダッラーの一家の間には姻戚関係があったため、学生時代のアリーは休暇になるとこの仕立屋に行つて、ザイン・アル・アブ・デインと共に仕事を手伝っていたという。このためアリーは、長じてからも縫い物が得意であった。<sup>(39)</sup>

#### 四 アーツザ

陸軍士官学校を卒業し、一九一四年に第十一連隊付の少尉に任官したのちに、一九一六年三月、アリーはアーツザ・ムハンマド・アブ・ダッラーと結婚した。このアーツザの社会的背景（ちなみに彼女はのちの「一九二四年革命」の際、近代的な意味での政治行動に始めて参加したスーダン人女性の一人となる）は、どのようなものだったの

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

うか。

興味深いことに、アーツザの父ムハンマド・アブダッラー・ワド・ドゥンクラウイー Muhammad 'Abdallah Wad al-Dunqlāwī もまた、ハンダクの出身であった。彼は舟大工であった。マフディー国家時代、彼はマフディー国家の都オムドゥルマーン出身のファアティマ・ムハンマド・ハサン Fatima Muhammad Hasan という女性と結婚した。ファアティマは、上エジプトのジャアーフイラ部族 [al-ǧa'āra] 出身のエジプト兵と、デインカ出身の女性との間に生まれたが、母方の親類ファドル・アル・マウラー・アッ・サーデイク Fādī al-Mawlā al-Sādiq がマフディー軍の部隊長 (ラアス・ミア rasmiā Ⅱ 「百人長」) としても、またスーフイー教団サンマーニー教団 al-Sammāniya のシャイフとしても知られる影響力ある人物だったため、幼少時から、オムドゥルマーンのカーラ地区 al-Kāra にあるこの人物の家に身を寄せていた。ムハンマド・アブダッラーとの結婚後、娘アーツザが生まれた。二人がどこで結婚したのかは不明だが、夫がハンダクで暮らすことを望んだのに対し、ファアティマはオムドゥルマーンで快適な都市生活を送り続けることを好んだと言われ、これが結局は離婚につながった。後年、英・エジプト「共同統治」の初期にファアティマは、彼女の母の「姉妹」(これが厳密な意味の姉妹だったかどうかはまたしても不明であるが) のバフル・アル・ワールディーという女性がリーハーン・アブダッラーという有力な将校 (Ⅱアリーの後見人) と結婚したため、ハルトゥームのブツリ地区のリーハーン・アブダッラーの家に娘アーツザと共に移った。アリーはこの家で、アーツザと出会うことになる。<sup>(4)</sup>

このように見てくると、アリーとアーツザという夫妻は共に、その両親を通じて、間接的にはあれ、ハンダクと関係を有していたことが分る。しかしながら、(元奴隷の息子、あるいは離婚女性の娘、といった立場からすれば当

然なことかもしれないが）彼らがこの北部の共同の「故郷」に対し、強い愛着を持っていた形跡はない。むしろ、アリーの両親やアーツザの母は、これまで見てきたように、旧体制の崩壊によってもたらされた流動的な社会状況の中で、新しい人生に乗り出すことを選んだ（あるいは余儀なくされた）範疇の人々に属していた。

他方、アリーの子孫は現在では、アリーとアーツザの婚姻を、（リー・ハーン・アブダッラーという人物の存在を核にする形で再構成された）「親族」関係によって説明しようとする傾向を持つ。この説明によるならば、アーツザは、アリーの「母方のおじ」の妻の「姉妹」の娘、であり、その意味ではアリーの親族の女性、いとこともいべき存在なのである。だが、これは、非常にゆるやかに辿られた「親族」関係であることに注意せねばならない。二人は共に母方ではデインカと関係があるが、父方で言うならばアリーはヌバ山地出身、アーツザは「ハンダカウィーヤ」であった。

ここからは、「共同統治」初期期の北部スーダンの都市部には、「部族」原理が実際にはもはや機能しない、複雑で流動的な社会状況が生まれていたことが窺われる。これこそはのちに英当局によって「脱部族化した黒人」、不安定な「奴隷種 slave stock」の人々の出現、として捉えられた現象であった。<sup>(1)</sup> だが、こうした流動的状況は実は「黒人」（＝南部やヌバ山地出身者）に限定されたものではなく、当時の北部スーダン社会全般に多かれ少なかれ観察されたものではなかったかと考えられる。マフディー運動・マフディー国家期の経験を経た北部スーダン社会は、もはや「部族社会」ではなかった。

いずれにせよアリーとアーツザは、当時のスーダン社会の現実の産物である新しい家族を形成した。

## 五 若い将校

一九一六年、アリーが所属していた第十一大隊はヌバ山地のタロデイ Talode に派遣され、アリーもアーツザを伴って赴任した。その後、ダール・フルのファーシル *Faarsil* に駐屯していた第九大隊に転属となり、約二年をこの地で過ごした。<sup>(12)</sup>

この時期のアリーの社会的活動や政治的傾向に関する情報はほとんどない。しかしながら妻のアーツザは、アリーがこの頃既にある種の使命感、自分にはやりとげるべき仕事があるという意識を持ち始めていたことを窺わせる、興味深いエピソードを伝えている。それによると、ファーシル駐屯時代のある夜、アリーは夢を見た。夢の中で彼は死に、四人の男によって墓地に運ばれたが、そこにひとりの人物が現われて男たちに尋ねた。「これは誰か?」「アリー・アブド・アツ・ラティーフです」と彼らは答えた。するとその人物は、

「アリー・アブド・アツ・ラティーフはまだ呼びにやっていない。アリー・アブド・アツ・ラティーフには彼の目的を遂げさせるがよい。彼にはその目的を遂げさせよ。それから、それから……」

ここでアリーは夢から醒めた。彼は身を清め、礼拝をした後で、アーツザに夢の内容を物語ったという。<sup>(13)</sup> また、アーツザによると、アリーは妻に対し、将来何が起きることをほのめかしつつ、こう述べた。「言ったら、怖がるだろう。」「何を怖がるの? 私は死ぬの?」とアーツザが訊くと、アリーはこれを否定し、それからこう続けた。

「はつきりとは分からないが、この国に何かが起き、私はそれに加わるだろう。そして君もまた、私と一緒に少

し加わることになるだろう」<sup>(44)</sup>。

陸軍士官学校を優秀な成績で卒業したばかりの若い将校が、過剰な使命感を持つことがあってもおかしくはない。また、第一次世界大戦さなかとという当時の時代状況では、世界の秩序に大きな変化が生じつつあることは（スーダン西部にあつても）感じられたであろう。ただ興味深いのは、この場合、使命感や差し迫った変化の予感が、夢という、神秘主義的な形で表現されていることである。ちなみに当時のダール・フル（同地は一九一六年にイギリスにより、第一大戦と不可分の関係にあつた軍事作戦の結果として征服・併合されたばかりであつた）には、（マフデーイ概念とも関連のある）「ナビー・イーサー Nabi' al-'Isa」信仰、あるいはマフデーイの遺児サイイド・アブド・アッ・ラフマーン Sayyid 'Abd al-Rahman は特殊な使命を帯びているという観念（これは英征服に伴い、ダール・フルに東部から流入したものであつた）など、神秘主義的あるいは黙示録的な潮流が蔓延していた。このような環境がアリーに影響を与えた可能性も否定できない。

ダール・フルでの約二年間の勤務の後、アリーは南部に配属となり、まずバフル・アル・ガザール州のルンベクで勤務し、ついでシャンベ郡 Shambe のマームール ma'mur（郡長）<sup>(45)</sup>を務めた。この約三年間の南部滞在の間に、アリーは勤務のかたわら大量の象牙を集め、それを休暇中に北部に持ち帰って売りさばき、ハルトゥームに二軒の家を購入するという才覚を示した。<sup>(46)</sup> 結果として、父アブド・アッ・ラティーフはドウエムを引き払い、ハルトゥームに来て暮らし始めた。<sup>(47)</sup> なお、この頃までにはサブルは既に世を去っており、アブド・アッ・ラティーフはラフマ・ジャール Raha Jabir という女性と再婚していた。一九一八年、アリーは中尉に昇進した。同年、アーツザとの間に長女ニアマト Ni'mat が誕生した。

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

南部勤務の後、おそらく一九一九年頃に、アリーはワド・マダニー Wad Madani の第十四大隊に転属となった。これが、彼が将校としての特権的な社会的ステータスを享受していた最後の日々であり、今日彼の家族たちが記憶していることの多くはおそらくはこの時期に関するものである。アレッザによれば、アリーは少食であり、酒もタバコも嗜まず、夜遅くまで読書や書き物をしていた。<sup>(48)</sup> チェスと乗馬を好み、アブラク Abraq という名の馬を持っていた。<sup>(49)</sup> エジプトの新聞に良く目を通していて、ワド・マダニー屈指の知識人の一人として注目されつつあり、<sup>(50)</sup> 休暇中にはハルトゥームに行き、オムドゥルマーンの「学卒者クラブ」の会合等に出席していた。<sup>(51)</sup> (一九二一年にはアリーは同クラブの執行委員会のメンバーであった。クラブで「サラディン Sa'id al-Din al-Ayyubi」という劇が上演された際、アリーはその準備に加わったが、そこではどうやら衣装担当として彼の縫製の技術が役立ったらしい。)<sup>(52)</sup> のちにエジプト共和国の初代大統領となるムハンマド・ナジブ Muḥammad Najīb は、当時将校としてハルトゥームに勤務していたアリーと親交があり(ちなみに彼はスーダンで育ち、ゴードン・メモリアル・カレッジで学んだ人物である)、アリーのハルトゥームの家をしばしば訪れていた。アレッザはこの夫の友人のために、エジプト風にいったコーヒー(「カファ・マズブート」)を出したことを覚えている。<sup>(53)</sup>

しかしながら、若いスーダン人エリートとしてのアリーのこのような生活は、その後、彼が政治活動に身を投じる中で大きく変化していくことになる。

〔上〕の終わり)

【付記】 本稿は筆者がアラビア語で刊行した Yoshiko Kurita, *Al-ʿAbd al-Latif wa Thawra 1924, al-Qāhira: Markaz al-Dīrāsāt*

al-Sudanīya, 1997 の主として第三章の内容をベースとしつつ、日本語読者のために必要と思われる加筆・整理を行ったものである。

- 1 栗田禎子『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』大月書店、二〇〇一年、第二部第二章。また、Yoshiko Kurita, “The Concept of Nationalism in the White Flag League Movement” in Mahasin Abdel Hag Al Safi (ed.), *The Nationalist Movement in the Sudan*, University of Khartoum, Institute of African and Asian Studies, 1989, pp. 14-62.
- 2 栗田禎子「スーダン近現代史上における「脱部族化した黒人」の役割に関する予備的考察」『東京都立大学人文学報（歴史）』二三八号、一九九三年。
- 3 ハルトゥームの国立文書館 (NRO) 所蔵 Kordofan I/1360: Intelligence – Future Status of the Sudan: Political Activities of Various Persons, Letter from the Civil Secretary to the Governor of Kordofan, 3 April, 1934. 後述のように、この報告書に含まれるデータのかなりの部分は、筆者が一九九五年にスーダンで行なった調査・インタヴューの結果、正確であることが明らかになった。
- 4 Husayn ‘Alī Muhammad Ibrahim (ハンダク出身) との一九九五年二月一〇日ハルトゥームにおけるインタヴュー。なお、Musayyāb は「Musāの子ら」、Hasanāb は「Hasanの子ら」の意。語尾の *-āb* は「(誰その) 子ら」を示す接尾辞で、共通の先祖を持つ血族集団を指す、北部スーダン独特の表現である。ムーサイヤーブとアブダッラー・ハムザの経歴に関しては、Anders Björkelo, *Prelude to the Maldiyya: Peasants and Traders in the Sherdti Region, 1821-1885*, Cambridge University Press, 参照。
- 5 Husayn ‘Alī Muhammad Ibrahim との一九九五年二月一〇日インタヴュー。ハンダクの人々はこの工場を「ケーラーハナナ」(トルコ語の “kâhâne”, すなわち「工場」の訛った形) と呼んでいたという。Husayn ‘Alī Muhammad Ibrahim はこの情報を、スライマーン・アブダッラー・ハムザ (ハムザ・ムーサーの孫。一九九一年没) から聞いたという。Muhammad ‘Abd al-Rahim, *al-*

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

*Nida' fī Daf' al-Jihā'* (欺瞞の論駁の呼びかけ) al-Qahirā, 1952, p.239 をも参照のこと。なお、工場の跡は、一九九五年二月〜三月に筆者がハンタタを訪れた際もまだ識別可能であった。

9 Muhammad 'Abd al-Rahīm, *op.cit.*: Richard Lepsius, *Letters from Egypt, Ethiopia, and the Peninsula of Sinai*, London, 1853, pp. 163-165, 190-194; Richard Hill, *Egypt in the Sudan 1820-1881*, London, 1959, pp.54-55, p.76.

7 Kordofān I/13/60, Letter from the Civil Secretary, 3 April, 1934. また、スライブーン・アブダッラー・ハムザに対し Mustafa A. 'Alī が一九八七年九月に行なったインタヴュー記録 (このインタヴューの録音記録はベルゲン大学に保管されており、Anders Björkhalo 博士の厚意により利用が可能となった。) *«مذكراتي»* al-Ṣabr Qasam Allāh Faḍl al-Sayyid に対し筆者が行なった一九九五年二月一〇日ハルトゥームでのインタヴュー。

8 Muhammad Husayn Khān (アリー・アブド・アッ・ラティーフの娘婿) との一九八六年二月一〇日オムドゥルマーンにおけるインタヴュー。

9 Kordofān I/13/60, Letter from the Civil Secretary, 3 April, 1934. al-Ṣabr Qasam Allāh Faḍl al-Sayyid との一九九五年二月一〇日のインタヴュー。

10 Durriya Muhammad Husayn との一九八六年二月五日オムドゥルマーンにおけるインタヴュー。 al-Ṣabr Qasam Allāh Faḍl al-Sayyid との一九九五年二月一〇日のインタヴュー。このインフォーマントの女性 al-Ṣabr の母 al-Shiha Zayn (文字通りには「健康は美德」の意) とアリー・アブド・アッ・ラティーフの母 al-Ṣabr Zayn (忍耐は美德) の意) は共に、ムハンマダイン・ムハンマダインの家に仕えていた。この女性が al-Ṣabr と名づけられたのは、母の同僚だったアリーの母サブルにちなんでのことであった。

11 al-Ṣabr Qasam Allāh Faḍl al-Sayyid との一九九五年二月一〇日のインタヴュー。このターヒルは一族の中では「ワド・アル・シヤンガーウィーヤ Wad al-Jangawīya」(=「ティンカ女の息子」の意) と呼ばれていたという。 Ahmad Hasan "Khayr"

- Muhammadaynとの一九九五年三月一日ハンダクにおけるインタヴュー。
- 12 *Salwa Muhammad Husayn* との一九九五年一月二七日、三月二一日オムドゥルマーンにおけるインタヴュー。
- 13 一九九五年五月四日付の *al-Kharrim* 紙（発行地カイロ）掲載の *Mahā* ‘Abd Allāh Hamad Ḥajj al-Amin 筆の記事。また、‘Abd Allāh Hamad Ḥajj al-Amin の一家に対し筆者が行なった一九九五年七月二日カイロでのインタヴュー。
- 14 彼女の名は「ダーラ・ピント・アル・ハビール」もしくは「ダーラ・ピント・アリー・アル・ハビール」として記憶されている。‘Awad al-Karīm ‘Abd al-Ghanī Hasan との一九九五年二月九日ハルトゥームにおけるインタヴュー。また、ハンダクの
- ‘Abd al-Ḥafiz Muhammad ‘Abd Allāh によって保存されている系図（一九九五年三月に閲覧）。
- 15 スライマーン・アブダッラー・ハムザに対し *Musfata A. ‘Alī* が一九八七年九月に行なったインタヴュー記録。
- 16 *Hill, op.cit.*, p.76, n.2.
- 17 スジュンミーがハンダクに来た際、彼は *Iyās Ahmad Hasan* (アリー・アブド・アッ・ラティーフの父の息子) の家に逗留した。(ハンダクに残る資料、‘*Mashrū‘ Ta’rīḥ al-Khandaq*’ と題された文書より)。スジュンミーはハンダクの住民の大半を *Dongola al-‘Urḥ* の軍事基地に移動させようと考えており、このために町の二つのモスクの屋根を運び去った、とも言われる。
- ‘Abd Allāh Yāsīn *Musfata* との一九九五年三月二日ハンダクにおけるインタヴュー。
- 18 *Kordofan* 1/13/60, Letter from the Civil Secretary, 3 April, 1934.
- 19 彼の生年は孫娘の *Durrīya Muhammad Husayn* によれば一九八六年である（一九八六年二月五日オムドゥルマーンにおける同人とのインタヴュー）。これに対し、一九九二年としているものとして、‘*Khadija Zuruq, Mansu‘a Shakhṣiyat Thawra 1924* (1924 年革命人名録), al-Kharīḥ, n.d., p.36 および ‘*Abd al-Hamīd Ibrahim ‘Abd al-Rahmān, al-Za‘im ‘Abd al-Latif* (指導者アリー・マブド・アッ・ラティーフ), al-Qāhira, 1950, p.22 がある。他方、英当局は彼は「一九二四年革命」当時三〇歳だったとしており、これに従えば生年は一九九四年と(ごう)になる。Saeed Moh. Ahmed el Mahdi (ed.), *The White Flag League Trials, Documentation*

- Centre, Institute of African and Asian Studies in Collaboration with the Department of Private Law, University of Khartoum, Khartoum, 1974, p.2.
- 20 Kordofan I/13/60, Letter from the Civil Secretary, 3 April, 1934.
- 21 Durriya Muhammad Husayn との一九九五年二月一日オムドゥルマーンにおけるインタヴュー。
- 22 フアルカの戦いに関する「Na 'am Shugayr (ed: Muhammad Ibrahim Abu Salim), *Tarikh al-Sudan* (スーダン史), Bayrut, 1981, p.860 参照。
- 23 BR. Mitford, "Extracts from the Diary of a Subaltern on the Nile in the Eighties and Nineties", *Sudan Notes and Records*, Vol.XVIII, Part II, 1935, pp.173-174.
- 24 'Abbas Ahmad Muhammad Qadaḥ al-Dam との一九八七年二月一三日オムドゥルマーンにおけるインタヴュー。彼によれば、エジプトから引き揚げて来て二〇世紀初頭にオムドゥルマーンのアッバースィーヤ地区に住みついたスーダン人兵士たち（この地区名自体が彼らの兵舎があったカイロの街区名に由来するという）がエジプト風の生活様式や食習慣を持ち帰った。
- 25 Jami 'a al-Khartūm, Ma'had al-Dirasat al-Adabiyya wa al-'Asiyawīya, Markaz al-Tawthiq, *al-Riwayāt al-Shafawīya li-Thumunat* 1924 (一九二四年革命参加者たちの述懐。以後 '*al-Riwayāt* と略記), Vol.II 所収の al-'Āzza Muhammad 'Abd Allāh (マリー・アブド・アッ・ラティーフの妻) のインタヴュー記録, p.421.
- 26 J. Spencer Trimmingham, *Islam in the Sudan*, 3rd Impression, London, 1983, p.228, n.2. ちなみにアリーの「母方のおじ」で兵士としてエジプトに滞在した経験を持つリー・ハーン・アブダッラー(後述)もまた、アフマド・バダウィー教団のメンバーだったという。Muhammad Husayn Riḥān との一九八六年二月一七日のインタヴュー。また、アリーがアフマド・バダウィー教団に触れたのは、一家がスーダンに戻った後に定住した白ナイルの町ドゥエム(後述)でのことだった可能性もある。ドゥエムには上エジプトからスーダンに移住してきたジャアーフィラ部族のコミュニティが存在したが、彼らの間で最も影響力を持つ教団は

アフマド・バダウィー教団だった。

27 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日のインタビュー。

28 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日、一九九五年一月二七日のインタビュー。

29 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日のインタビュー。リーハーン・アブダッラーはさらに詳しくは、Dinka Rek 中の Awan というグループ（居住地はゴケリヤルの北の *Painti* 村）に属していたという。彼の本名および出身に関するこれらの情報は、一九七〇年代に Muhammad Husayn Rihān のもとに、南部から来たティンカ青年（フランススという名で、リーハーン・アブダッラーの親類だと主張していた）によってもたらされた。Muhammad Husayn Rihān との一九九五年二月一日のインタビュー。

30 サブル自身が Dinka Rek の出身だったという情報もある。一九八四年に南部で勤務していた北部人の軍人は、当時のバフル・アル・ガザール州の知事 Gabriel Mathiang（レンベク出身。Dinka Agar の出）から、アリー・アブド・アッ・ラティーフの母は Mashra'a Shol（Mashra'a Ridq の別名）出身の Dinka Rek だと聞いたという。ただし、Gabriel Mathiang がこの時既にリーハーン・アブダッラーとサブルは兄妹だという説を知っており、その知識を踏まえた上で、（サブルではなくリーハーン・アブダッラーについて）自分が知っていることを語っていた可能性もある。

31 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日のインタビュー。なお、Kordofan I/13/60 所収の報告書では英当局は、アリーは Rihān Hanna という名のオムドゥルマーンの商店主に引き取られていた、としている。しかしながら、これは、「Rihān」という名前のために生じた単なる混同、人違いのようである。アリーの家族からは、Rihān Hanna なる人物に関する情報は一切得られなかった。もっとも、この商人がオムドゥルマーンに実在したことは確かであろうである。Abbas Ahmad Muhammad Qadhi al-Dam との一九九五年二月二五日のインタビュー。

32 「ハルワ」は元来スーフイーの修行所を指すが、スターダンの場合、初等クルアーン学校を兼ねている。なお、このハルワは

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

- 「al-Shaykh Khalfah Saïh のハルワ」と呼ばれていた。
- 33 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日のインタヴュー。陸軍士官学校ではアリーはフサインの一年上級であった。
- 34 たゞすは *al-Riwayāt*, Vol.1, p.130 の Husayn Isma'īl al-Mufīr の証言参照
- 35 Yusuf Bedri, Peter Hogg (tr. and ed.), *The Memoirs of Bahār Badri Volume 2*, London, 1980 所収の G.N. Sanderson による解説序文、p.73, n.213 参照。
- 36 Sulaymān Kisha, *Siq al-Dhikrīyat* (想ひ出の市), Umm Durmān, 1963, p.202.
- 37 FO.371/10905, No.1901 Report on Political Agitation in the Sudan, p.5.
- 38 Muhammad Ādam Adham (Zayn al-Ābdīn の甥で娘婿) との一九八六年二月一七日ハルトゥームにおけるインタヴュー。ザイン・アル・アープテイーンの母ファアティマは元来は北部の、ハトミー教団とも関係の深い家系の出身であったが、マフデイー運動の勝利後、ハリーフア・アブダッラーヒがエジプト遠征を試みた際に、一家はアブド・アッ・ラフマーン・アン・ヌジュエーミー率いる遠征軍に同行することを余儀なくされた。ヌジュエーミー軍の敗北後、彼らはエジプト軍の捕虜となってワーデー・ハルファーに連れて行かれた。ファアティマはここでアブド・アッ・タームと出会い、結婚したという。
- 39 Durrīya Muhammad Husayn との一九八六年二月七日のインタヴュー。また、アリーはハルトゥームの英人クラブの外で会員たちの馬の番をすることで小遣い稼ぎをしていたとする説もある。FO.371/10053, No.7895, *Disturbances in the Sudan*, p.53. しかし、これはもっぱら英当局により流布されたイメージであり、アリーの家族は強く否定している。
- 40 al-Āzza Muhammad Ābd Allāh および Durrīya Muhammad Husayn に対し、筆者が一九八六年二月五日に行なったインタヴュー。また、 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日のインタヴュー。
- 41 FO.371/10905, No.1901, p.8, pp.12-13

- 42 *al-Riwaḡyāt*, Vol.II 所収の al-ʿazza Muhammad ʿAbd Allah のインタビュー記録、p.373。なお、アリーはシェンディーでも勤務したことがあ  
る可能性がある。Hasan Najiba, *Malami min al-Mujtamaʿ al-Sadani* (スーダン社会の諸相), Vol.II, 2nd printed, al-Khartum, 1991, p.36 参照。しかしながら勤務時期等の詳細は不明である。
- 43 *al-Riwaḡyāt*, Vol.III 所収の al-ʿazza Muhammad ʿAbd Allah のインタビュー記録、p.419。
- 44 *Ibid.*, p.418。
- 45 *Ibid.*, p.373。
- 46 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一〇日のインタビュー。二軒の家のうち一軒は現在の「衛生学部通り」(Shariʿat Kulliyat al-Sihha) にあり、「白旗同盟」の会合が開かれたのはここであった。この家はのちに「ポート・スーダン・ホテル」という小さなホテルに改装された。もう一軒の家は、ハーシム・ベイ通りにあった。
- 47 Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一三日、および一九九五年一月二七日のインタビュー。アブド・アツ・ラティーフは一九三〇年頃に死去したという。
- 48 *al-Riwaḡyāt*, Vol.II 所収の al-ʿazza Muhammad ʿAbd Allah のインタビュー記録、p.379, pp.404-405。
- 49 Durrīya Muhammad Husayn との一九八六年二月七日のインタビュー。
- 50 *al-Riwaḡyāt*, Vol.I, p.87 の Muddathtir al-Bashr の証言。
- 51 Durrīya Muhammad Husayn との一九八六年二月五日のインタビュー。
- 52 Subayman Kisha, *Saḡ al-Dhikrīyāt*, p.202。オムドゥールマーンの「学卒者クラブ」における一九二二年一月二七日の「サラディン」(ʿSalāḡ al-Dm al-Ayyūbīʿ) 上演に関しては、以下の著作に印象的な記述が見られる。Hasan Najiba, *Malami min al-Mujtamaʿ al-Sadani*, Vol.I, 2nd printed, al-Khartum, 1960, p.230。
- 53 Durrīya Muhammad Husayn との一九八六年二月七日のインタビュー。また、Muhammad Najib, *Kunt Ra tsan li-Misr* (私はエジ

アリー・アブド・アツ・ラティーフの生涯

東洋文化研究所紀要 第百五十九冊

プトの大統領だった) al-Qahira, 1984, pp.38-39 も参照のこと。

# The Life of ‘Alī ‘Abd al-Laṭīf : An Attempt to Analyze the Social Background of the Sudanese 1924 Revolution

(Part I)

Yoshiko KURITA

‘Alī ‘Abd al-Laṭīf (c. 1896~1948), an ex-officer, was a leader of the “1924 Revolution”, which is generally regarded as the first “nationalist” movement ( in the modern sense) against British imperialism in Sudan. He led a political organization called the “White Flag League”, which played a central role in the course of the political developments in 1924.

He belonged, at the same time, in terms of origin, to what the British colonial authorities described as the “negroid but de-tribalized” people, i.e. a people of “ex-slave” origin from the South or the Nuba Mountains, living inside the Northern society.

Since a detailed account of the life of this person seems indispensable for the understanding of modern Sudanese history (both for the study of the nature of “Sudanese nationalism” he and his colleagues advocated, and for the study of the social realities which existed behind these political phenomena), this article tries to present, as far as possible, a comprehensive picture of the life of ‘Alī ‘Abd al-Laṭīf. It relies mainly on two sources, i.e. the official reports prepared by the British colonial authorities on the one hand, and the interviews with the relatives and acquaintances of ‘Alī ‘Abd al-Laṭīf, which were carried out by the writer of present article in Sudan during the years 1986~1995, on the other hand.

The present article, which constitutes the first part of the whole work, starts by examining the social background of his parents. Then it proceeds to examine the circumstances surrounding his early life, education, and marriage, covering the period until the end of the First World War, approximately.